1995 年の猛暑に思う

今年の夏の暑さは昨年以上だったのか，蝉の声もアスファルトを溶かさんばかりで，翌朝の日差しと鳴き声を思うと，めげてしまう夏でした．絵日記を毎日書いている子供たちは連日お日様マークを書き続けていたのでしょうか．天気欄は不用ではないかなどと余計なことが気になりました．この天気欄についてもう一つ気になることがありました．今春，年次大会を終えて，翌日ピッツバーグで開催された小規模な委員会に参加しました．暦上は同日の午後でしたから，眠い目を擦りながらいると，戸外の天気は目まぐるしく変化し，その様は眠気を覚ますのに十分な刺激を与えてくれました．天気は曇りのち雪のち晴れのち雨のち曇り，という具合でした．絵日記の天気欄にはどう書けば良いのか，納得できる説明をまだ聞いていません．

英語とフランス語の間の天気予報翻訳システムがありますが，米国のそのような天気に出会うと，100%の翻訳率をなかなか達成できないのももっともなことに思われます．天気状況を過去の事例で網羅し切れず，多様な状況変化のために新たな言い回しや表現が現れ，処理能力が追随できないのでしょう．翻訳ばかりでなく，お天気マークを自動生成するシステムも考えられますが，絵日記の記入に困るように，お天気マークによる表現も難しそうです．そのためなのか，天気予報が確率的数値で表現されるようになってしばらくたちます．しかし，お天気マークによる表現が直感的には良く馴染みます．

自然言語処理研究についてもちょっと気になることがあります．新聞データなどの大規模コーパスから言語の諸相を探ったり，また言語のモデルを構築したりする研究が最近盛んになっています．テキスト上の単語や品詞の出現順の情報を使って語が現れる確率モデルを構成したり，単語とその前後に現れる単語との共起性頻度を計算して，単語をあるクラスに自動分類したりする研究が目につきます．それらの研究成果は具体的な応用システムに適用すると高精度の処理を実現してくれたり，見落とされていた事実を示してくれたりします．しかし，そのような効果があっても，得られる結果が果たして言語直感や社会常識にふさわしいものであるのか，あるいは正解であるのか，評価したり，判断したりする手立てを現在持っていないとも言えます．AP 電による電子新聞 3 年分，約 1 億 3,000 万語，異なり語 53 万語について相互情報量を使って単語の自動分類実験を試みていますが，その結果を直接評価する方法を見つけていませんし，人手で検証するには膨大過ぎます．また，n-状態の確率的言語モデルを作っても，それを直接評価する方法もないと思われます．

天気予報に話を戻すと，マクロ気象・メソ気象・ミクロ気象という分化が進み，長期予報や局地予報の技術分野が確立されてきたと聞きます．それぞれの視点や要求に応じて期待される天気予報の内容と質が異なりますが，いずれの予報でも，その当たりはずれは実感できそうです．一方，自然言語処理の研究では，大規模なコーパスが使えるようになっても，現在は量だけが議論の枠を定め，得られる文は何でも事実として大部屋にほうり込まれて，量を示す数字だけが元気に見えます．本来，そこから得られる結果が何を示すのか十分な考察が重要です．現状

は，コミック記事から解説書や社説，外交辞令的文書，商用文書，各種音声対話などの違いを論じる段階には至ってないように思われます．大量のコンピューターパワーと大規模なコーパスを使って，今後様々な成果が得られると期待されますが，どのような質の結果が得られたか誰もが納得できる評価方法が望まれます．また同時に，文書の伝達相手や話し手の立場などによる言葉の使い方の差異を捉えることのできるきめ細かい言語処理のアプローチが期待されます．

飯田　仁
(株) ATR 音声翻訳通信研究所